別紙様式３（修士申請者用）

（西暦）　　2018 年度　博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名（注：学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること）

ソフトシステム方法論に基づいたワークショップから得られる参加者の学び
－認知症カフェ運営課題の検討を通して－

学位の種類：　修士（作業療法学）
首都大学東京大学院
人間健康科学研究科　博士前期課程 人間健康科学専攻　作業療法科学域
学修番号　17896605
氏　名：　野本潤矢
（　指導教員名：小林法一 教授　）

注：1 ページあたり 1,000 字程度（英語の場合 300 ワード程度）で，本様式 1～2 ページ（A4 版）程度とする．

<はじめに>認知症カフェは，認知症の人や家族などが自由に参加できる場として期待が寄せられている．一方で，運営上の課題が存在しており，どこも運営方法を模索しているのが現状である．筆者が地域住民や専門職と共に運営スタッフとして関わっている認知症カフェにおいても，運営方針に関するさまざまな考え方が混在し運営上の課題となっている．これらの課題解決に向けて，ソフトシステム方法論（SSM）を活用したワークショップによる学びが有効ではないかと考えた．
<目的>ソフトシステム方法論に基づいたワークショップが，認知症カフェ運営スタッフにどのような学びをもたらすかを明らかにすることを目的とした．
<方法>SSM の 7 つのステージに倣い，認知症カフェを運営する地域住民 3 名と専門職 1 名を対象としたワークショップを開催した．「この地域で認知症カフェを運営するとはどういうことか」をテーマに，参加者が意見を出し合い，お互いの考えをすり合わせながら 1 つのモデルを作成した．そのモデルをもとに，認知症カフェにて実施可能な計画を立案・実行し，ワークショップ終了後に半構造化面接を行った．ワークショップ中の言動と半構造化面接により得られたデータをもとに質的に分析を行った．
<結果>ワークショップ開始当初の参加者は，【運営に対する期待と疑問】を抱きながら，【さまざまな意見との出会い】を感じていた．ワークショップの進行とともに異なる意見による葛藤を抱き，話し合いの場は足並みが揃わない協働作業になっていた．次第に，参加者は【徹底した意思の表出】を行うようになり，モデルの作成と共に【異なる思いや考えでも共有できる部分がある】という学びを得ていた．その後，参加者は，モデルをもとに作成した計画を運営スタッフとして現場で実行することで，【利用者の視点に立った仕組み作り】が必要であるという学びを得ていた．さらに，ワークショップ全体を通して，【運営スタッフのあり方としての新たな自覚】が芽生えていた．
<考察>SSM に基づいたワークショップによって得られた学びは，運営スタッフ間の連携の課題と継続的な運営方法の課題に対応した学びであると同時に，チームを形成するうえで必要なスキルの一部に対応する学びであったと考えられる．また，SSM の特徴である，異なる立場の人々と考え方を共有するモデルの作成，それらを踏まえた計画の実行が，参加者に対してさまざまな学びをもたらしたのではないかと考えられる．